

気ままに ブックトーク！

6 「『戦後 80 年』で 1 冊」



この日参加した 5 人が紹介した本を順に紹介します。初参加の方もおられて、いつも以上におしゃべりがはずみしました。本の紹介だけでも倍のページになりましたが、おしゃべりを紹介する紙面の余裕がありませんでした。文字も小さくなってしまって、すみません！

1 木内昇『かたばみ』

(KADOKAWA、2023 年)

戦時中から高度経済成長期に向かう時代を舞台に、槍投げ競技の元有望選手で引退後に教師となった山岡梯子（やまおかていこ）とその家族の物語。かたばみの花言葉「母の愛」は、「この小説の内容に合っている」。『東京新聞』に連載していた時に読んだ、良かったという感想も他の方からありました。



2 新谷隆史『「食」が動かした人類 250 万年史』(PHP 新書、2023 年)

膨大に抜き書きされたノートを見ながら、食が動かした歴史のエピソードを紹介いただきました。とくに産業革命以降の科学技術の進展、グローバル化がもたらす現在の食の状況は、人間が人間を化かしているといっているのかも、と感じたそうです。本書の後に読んでいる、河上睦子『いま、なぜ食の思想か：豊食・飽食・崩食の時代』（社会評論社、2015 年）も紹介いただきました。



3 内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』(講談社現代新書、2007 年)&宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』(ちくまブリーマー新書、2019 年)

日本で自然と人のかかわりが戦後どのように変わってしまったのか、という視点から紹介。前者はキツネに限らず狸やイタチに化かされたという話を聞かなくなったというのが、いろいろ聞いたところ1965年。それはなぜをつきつめた歴史哲学書。

後者は自然相手の仕事である農家の若い世代が著者の世代と「干からびた田んぼで蛙が大量に死んでいた」ことをどうとらえたのかがまるで違っていたというエピソードなど、農に携わる人の自然観を紹介した書。



4 三島由紀夫『天人五衰』(新潮文庫、1977年)

「戦後80年」と時間を切り口にした読書がおもしろいと思って初参加された方が紹介。本書は「豊穰の海」4部作の最終巻。輪廻転生がテーマ。三島由紀夫は、雑誌『新潮』連載の最終回原稿を書き上げた翌日、1970年11月25日、自衛隊市ヶ谷駐屯地で自決。この事件の報道が三島に同情的でなかったことが記憶にあったそうです。三島由紀夫に関する本も含めて何冊か紹介いただきました。

木谷真紀子『三島由紀夫と歌舞伎』翰林書房、2007年／三島由紀夫『美しい星』新潮文庫、2003年／横山郁代『三島由紀夫が来た夏』扶桑社、2010年／適菜 収『日本人は豚になる：三島由紀夫の予言』ベストセラーズ、2020年

5 百田尚樹『永遠の0』(講談社文庫、2009年)

ご自身の2回の空襲体験も語っていただきました。戦争と聞くと鳥肌が立つし、戦後80年ではなくて敗戦後80年といわねばとも。特攻隊で死んだ方はどんな思いで飛んだのだろうと、この本を読み終わって知覧にも足を運ばれたそうです。一方、特攻隊で飛んでも生き残った人もおり、そういう人を取材した鴻上尚史『不死身の特攻兵：軍神はなぜ上官に反抗したか』(講談社現代新書、2017年)も紹介いただきました。

気ままにブックトーク 次回以降の予定

*2026年2月27日(金)13:30~「日本の芸能」で1冊

*2026年3月22日(日)時間未定 ふれあいまつりでブックカフェ出店(予定)



図書室ひろばは、予約なし・参加費無料の、気軽にみなさんが集える場所です。事業をやってみたい方は、ぜひ岡上分館までお問い合わせください。

■川崎市麻生市民館岡上分館■

〒215-0027 神奈川県川崎市麻生区岡上3丁目15-5

TEL:044-988-0268